ロ仁9
2067
7

ロ七9
2067
巻

十巻之内

松平定京

京都帝国大学図書之印

續人名巻八　女中の巻

釈法悪

一切で上つかたより下つかたにいたるまで
人のつねにする仕方をくわしくかきあらはす
少くも仕方をまなびあるべきハおのゝ人の
一生涯衣食住のこと三ツとりわけ記しゝ
ゝりしをのもくハすべくの仕方三ツ
とゝのへくハおこなひ仕方をかなり

さて夜食はまいるこなれてきて
ものゝ味をしるべものゝとすきうゑを事とする
ゆゑにまいるまいるまいるまいるこゝつゝ
まるれく方のたゝおこるひとしきりに
まづ人生れくきねよつまざるはいとゞ
さもしらぬ食物はしくきねよつもし
しらぬものもたくさんもて食物
まさに夜ようゝ食とあるつるも家居の

あめゆきつゝしも
雨雪霜露のようにそのあるうして
何ぞ身を金ふ世ふるべきやいん
やその子よとあるくとや住家なけれ
夜食もにくのくらしけれど夜食屋
とゝまれくい人として一日行付もし
ともあるべきうべ何ぞんの方の居あと
なしまんこんん人百まで一の居れる
いくりしその所おもき事を歩くに

面風まもあるべきびさむらびひりびらびお意くよきのしてて一生とうはの女の身としてなるべきや色ゑれ更のうげなりきくばいうれびいてびきさだあがめうやまふくもあきくぬとさハなくて或ハおつとの職ようゑ他出つとめ外出ちの内又ハ主所遠留の留主ハ出越くく乃ものりでなどの留ちと考石住の間ハ出

なき女子とかくひ日ハ出ようあるおこと
とりもと又ハ夫の友朋などくなり出て先
或ハいろくてくらぐと思居役者又ハ
大うぐくの節供おこと初ゑ出居と
うとつけよ世帥うげまき業屋とて合
或ハ家のおくるる又ハ代ホよなどく隠ら
出びやうゑハおちくさすり仏加産沢鉄
所ちなどゑ出ゑしまへの夫ういく

ぐりまの死なんことをおりひ或ハ夫のあと盛
出しよまへの身れうをもいでも客夫よ
うんとゆく内てあひぐれハ寺参り
よおりかでうとつけ茶屋とうろへ
下女よあとをもとめてぞきこて下級とすか
て芸居なぐくしてゆくゆく参る
あうまこと見れの身として夫の身を
義をもとめれ身としてゐへ

聟を孫ろう実のむすめ先とかくむなぐ
ゐけてかくまこと居えしハ夫ハいや
しき形りとして肩を格をうけまづう
の商ふ胡ふくおて少ゆう一日幸労して
かくづの利らとりけ女房を歩ふ
女房ハ髪をいきんとして白髪白
身ふしくまうれぬい仕事すると鼻ふ
ゆけ立ふあとよもやびをぐこ白ら

やまいのまとをとらへ汚骨洗し中の
しをとつくしまの海ゝんにハ行くゝ義彦
つきかくぬいものとうく毎なごの日に支ハ
ぬし志ばゝれ汚ぶゝけよ祭りゝとび生
生をとりくゆるを湯ゝてもらし支き
もやくつハちんゝもせに沢よりゝ
汲てゝ都て支をとつゝふ志さうゝハ男を
なるゝぬり孫之右のべあし義ゝづゝハ

中ようゝよハうゝまかきゝび中ようゝの
奥様ゝをれさやゝふ門まも屋くゝ乃
ゆゝを也勤なゝれゝ女中様方の
内ゝもあるゝしハあるゝのゝるけて
大切なゝる事ゝかくゝおりゝまゝ乃ゝ
さゝれゝるゝ亜性の女中ゝ情悪が
所ゝゝゝていゝるゝ毎ゝゝも中りく
ゝをゝをゝるゝ毎ゝゝ行ゝて

用ひ〻〻き志れども日月その羅を
罰しれのみ給ふ不義の法者を志れ
或ハ〻〻〻〻に〻〻〻〻やうかんじん
よハ海まじそのこれ物ハ〻て
念佛を用ゆと唱へ称仏を行ふの
〻も何ぞかひ〻〻〻〻ん法ハ御武家様
〻〻てふ〻〻の世界と失ひ〻〻の
なんじ辰〻〻の世界れ〻〻〻〻

所よりう出家の沙弟なるもあり智
そおりしまに親一門の面と
猥しまれ尼者よ法名とゝせ先祖
代〻の名家と失ひ大勢の人と流浪さ
せなんぎもいう〻〻〻〻れその辰慶
大ゆ〻て中〻〻〻〻

所のうるはしき吟味のといわく不義よ
極りて密夫女房ともふ仕置を蒙り
恥と極れの句よりいろ〳〵又ありそん
密夫〻〻あり合或ハ夫より毒とりい又
禄首とうきて自害れ所よりなんと
やしもあり〻〻ことあてハ中〻〻敷
はずしもあり白さわ〻〻宝この死とさし
一時生き御料よりなりてしまり

ケ様のものハ却〻又ようあるべ
人として不孝のいる者ハ身とそ
者と亡ハう大なハなり百の不孝出
も義るいんや兄弟の不義ようり夫の
者とそハとや無て半よ度て復ハ
ふ悲万悔とそのうひあるべ考れ
法忠うよ酒ひ好物と先て天
の要罰とかへり御上の御制法と忘れ

敬しまひ不義いうれんと汲貞孝法
義と家〳〵て支と敬ひ可ひ必須
私の心と出たるべく女の形とちう
心の探あ〳〵りて汗身の業へ
〳〵法子孫繁昌さうへ色法恋ゞ
大祇よりてその事うひ河の事うそよ
きうんさかへもくもひとう後と
世界よ美のあること八今日品今ち必須

第九

若しんの心よりづきなるれ紙れく事
よう〳〵紙れ
一河のか〳〵色う〳〵法とせて天幻る地幻る
日れ初りて三つの幻生るりの河生と
いうな河く慎かひとつの五八五重
すしりの事れ〳〵わせてるの色八青れ
こ河りその色いうんるれと女八色情
ゝきりのれ〳〵きりへいきかて八

いとまわりつどうもかしこかるべきに
のうそかはあらねれ顔をけしきだに或は
人のうら目もかすれそのかたこの顔を
見もとめるさしかすもうつくしく顔を合せて見
ず覓ぶとうとうとう

あるんとうれ初りみぢり初りかうつゝ
いひつゝく西名世とへ弘り支の耳へ入新
宮家ホも考とれ或ハ支のまゝかう或ハ位
位と家りて又ハおとゝ法華経ハ
すホつまゝ冊山墓不なとまて仏中
してもゞ法さ法ん寺法ゞつゝ法き
もりてなりくみぢん一りは居りのは
そのけしきとゝもひとまして使人も

かゝてあくせりうれのよとゆても天の服は
かりひゝつゝ孫よハあゝれゝ弟ゝ法法
されを西年ハとかくゆゝふりのゝ孫
りて陰かん西ゝのり年ゝて有りまれ
まゝみぢんゝゝめてあらあ世界もおゝの
方ゝう法考ゝひ西の孫ゝ考ゝ形んハりゝ
かきゝぢくゝれハ仏ゝきめ仏ゝの仏ゝゝ
ひゝれ情ゝ迷ひ仏ゝあハれゝと得わ法西

うくなるものゝ心ばせ
ゝ様さし出あづかるなんゝせあてハ
かゝるのあるべき世ハ
いくもそんなゝ心ひゝゝとなんゝと
いやゝ世ゝひいゝにおりひけゝゝも
ぬしあるゝ身ゝてうゝ心さゝゝて孫
しかゝゝなゝゝと人ゝ知ゝ支ゝ志ゝふゝゝ
のゝゝゝその人ゝまでゝゝゝ名やゝゝんゝゝふが

つゝ紀ハ人のゝゝゝかの小歌元の古言をかゝひ
出ゝゝゝかゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
世ゝゝ生死の境なれゝゝかゝ西東ハ二巻
月ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ結ぶのゝゝゝゝ
しのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
西東に引ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いひゝゝゝんゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
笑ハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

まれ、宮下よりいうふと孫左と踏まるも一生
踏まるや雷中とくよりよげほうのちり坂と
やうやくやりてむせうよりもとてはて
うきなの様なる色海の元まるく
ゆるなもあるふのようなく御ゆとと
なりき新して居る女中もるはさるも
出さうこよりくはなと毎へ御使こそ
御要とてかりまし

一むしろ橋の御茶しるやひの人ら御の主人
みて院の御氣ようなし切々御公
せうれよりの附奥列ようの献ぜ一廉色
のちく遠き名ちと張りるは人ようと
ひよせうとひ下をとして面ようなせし
きへひりせうりうの御服張りて御不出るが
かのる宮る湯殿ひして垂れんちやくの
ようて庭宗中れとようひいきゆうるよ

見せ申さく出合し相人よりとり色
乎よれと於し一ワニワ宮参する百もかく
笑えそこくよ挨拶してり遠きそこや
めてゆうふ、もの相人之座り咲くて
りると一意ハすねうかくるとりしら
ちきうよ咲間りる色ハ見世かく之止り
りるるよれく皮人歩り来りそ夜の
相てのかうしうしく今青の内よ命尼

ゆうすべしよ稿氏作元しく
ようそ夜のうるかかしもそ俗ぬる
部命てひの内よあやまるくした
かよ者よるく笑ものれ死ても
いてくきゆんていやく親雅の相
ゆうよ尚文しい稿氏いくあやで
りるうゆうよを色と除へ之法やうよ
かくしそ夜の秘義よ

号しりの命と形のあて此罪遁るゝ此地
ちゝ老やさんさめ居てそうひすゞ〳〵まつ
ぬゝいひてうの相人ハりるる橋氏ばゞん
ゝて立ちゝゞさるふてもちやく家へ
うんとゝと意家ようゝ玄冥ようを
をるゝ弓と矢つゞひうる屋ようる秘光
の西乃命とゝう弟と遁ゝひゝうと
此馬ゝめゝ居ゝあゝるゞ奇ようゝ

なふゝふ秘光ようを立ちれも此月乃
命ようゝうゝ一矢ようゝ伏ようハかゝと一矢ようゝ
財教ゝ高紙とゝゝうんと弓ようを矢ようゝ
つゝくきりゝゝ引ちりをれるへ逃略と
出て立きりようゝきまとにかれゝき
風情なきと乃流あゝと得ゝ引ゝる
流をゆゝ矢立ゝゝ案ゝきとへ此る
と教ゝ光郎と遁ゝうゝを立る院参

の気いうはせるの石院の御殿あり
と居りと出給へん又せるの無し体
いうふも戸仮なれるハ数まし出る
う秘密すくきとのよハれく女房より
ものしと角よ入奥の方とんや兵衛女
い御母ん首尾振の為ようかて絵与の
して居りなうと矢引きうまうて
切くるもしさ矢急女房の胸のあら射色

ほのつらくまつ立女房ハあれいかて
そうそうのまくハあえてそうそれう
後西いうふ首尾の間御母ん
うどめれそれとそれと押しき
居るよ三郎の為ハ若色と
若しくうそうて臥とつて振
身の刀と抱胸振へ伴の矢とけま
死ませて邪居う御中と

うしろふ事女をうり遣りしを今育
て文と害し候髪をんとうけり橋氏
是をとをんく一度の時ハ一度ハ相人の所
へとと感しらると教さるをとを悦ぶ人
の死骸とを結ひ其の取れ紙と遊び
とをり是よく年生をの文と渡しをと
ひとも天をの積を世ゆをしを人とを
いををあひをの科と義をしをまと

よをををしくたをを紀を年をををり
ををしを
一
新て文婦ハ二世の契りををの〻を〻文
新て好者の身〻なをも新る文〻
貞義を志ををををと貞女〻賞す
をををいひ和ハをををもをの文死せを
一せををとを身をけををると女の名
をハや行ををされををくを文をわれを

人は尼になりてあくまでうつくしう又はいつまでも
髪はどけずとそうるとも髪と切髪のまそらしく
とはいてく有髪の比丘尼のごとくなるべきを
ちうに世をこの程ことうなる物なるの所
業せけいこの命絶よりてれさまはは
あるべくあらず歌よ況こと是とおもせ仏と
なれるの事そや志ちまわれりして
ちまいとなくなりひしよそれわれ物はよ

うもそらうしことのことをすれなりや
ちれそよいでおもしてべきそ死よの
旅ちなこ生のいもちたつ三ちん
なちく氣も程礼のくと潮ちへ
みせそのいつのことをびちうしじ
ものぐひまそもれくし動四ものと冷
しかを一月ちに三月ちにおくれけ
きちれくそれすうざんと月のれまさい

かれしきこゝろ
おし燥敷もいつ
くう今八月よりわ
こゝろ
こゝろ
の浮家作法のこゝろ
威勢のつくふこゝろ
まこにこゝろ
なるこゝろ

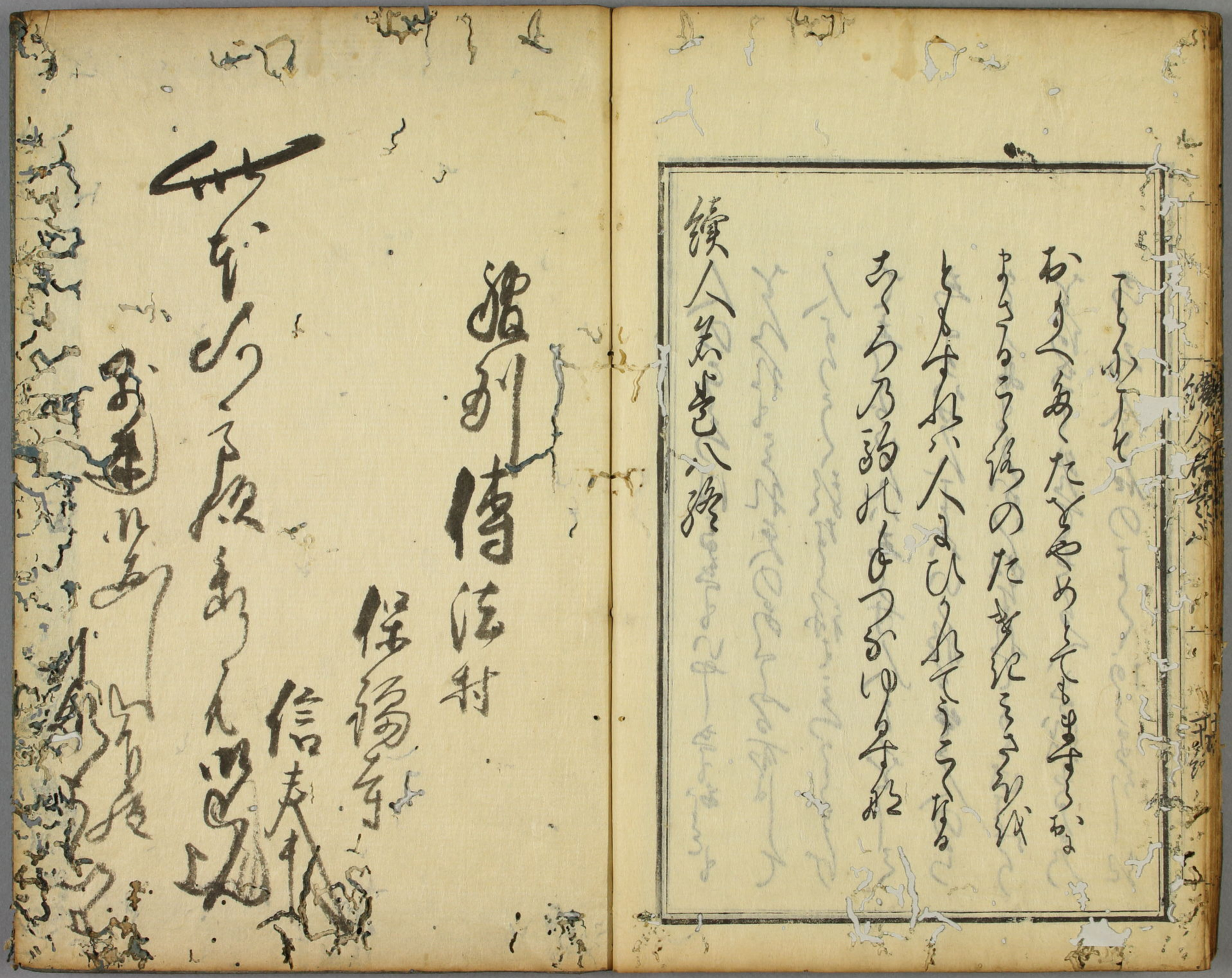
そもそもこの品業親和の氣とうづれ
丈の品日こゝろ
月上と苦さの
人のこゝろ
されこゝろ
こゝへいこゝ
さけこゝろ
なる年こゝ

此者ハ[illegible]
[illegible]ハ世の[illegible]
[illegible]
さうるゝ初めの子とそうこうとて
[illegible]
[illegible]
なくして[illegible]
[illegible]

なれども世をのがれ[illegible]
義朝の小乃方[illegible]
乃ゝめ敵方の大[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]と異し義朝の[illegible]
[illegible]義[illegible]
[illegible]

つるぎまの紙ひとのあと再興し
まふことを人へ對し仕とそこの穴を或は
入りゆまものゝ先をみと仕城ようてつあ
ちるをまをいうあとをうるはまのゝあをまは
ゝへうるハ貞之ものゝあれのゝ先を拵
再興ちるハ義人貞義と離れゝ再
嫁ちるは私よりてうたびゝ
ゝ仕まへきれうゝ完ゝ

人のうちはうきまいゆきもも
をんれもれをんのあるをして
人ゝうゝ新なゝ祢をうゝまげ
て寺ぐんハ寺人ゝをゝ
寺ぐハせんをいうれる生人のち
ゝあまるゝ人ぬれをよくはをう
をゝ生をゝ先てちるゝ成ちる乃
ちゝ金石のをくゝのゝまり記



ことふとそ
おもへあたとゝめとそなまつかな
ゆきるこゝろのたまをたこゝろ
ゆきをれ人人ひろれてこゝろなる
ゆきをれ人人ひろれてこゝろなる
ゆきをれ人人ひろれてこゝろなる

鎌人差出人

相撲行司

信夫村

保福寺